

西欧会議通訳小史

BERGEROT 伊藤宏美

(パリ第3大学通訳翻訳高等学院)

For Japanese people, “conference interpretation” means simultaneous interpretation, as professional interpretation was introduced in the 1950s in that form. However, in Western Europe, the form of conference interpretation widely used in multilateral meetings between the first and second world wars was consecutive interpretation. Professional interpreters developed their own note-taking techniques in order to render speeches lasting five, ten minutes or longer at a stretch. This period is known as the Golden Age of consecutive interpretation. The importance of consecutive interpretation in training programmes in European schools such as ESIT in Paris or ETI in Geneva, comes from this historical background.

はじめに

日本では会議通訳といえば同時通訳と一般には考えられている。1950年代に米国国務省が、米国各地を回る日本生産性本部のミッションのために日英同時通訳者を養成し(西山 1970; 村松 1978)これが日本におけるプロの通訳者養成の草分けになったことはよく知られるところである。西欧においては会議通訳の歴史は第1次世界大戦終結と同時に始まり、第2次世界大戦後に同時通訳が定着する前に逐次通訳全盛時代があったことは、日本ではあまり紹介されていない。西欧の会議通訳者訓練で逐次通訳が重視されるのもこのような歴史的背景によるところが大きいので、簡単に西欧の会議通訳史をたどってみたい。

1. 会議通訳の始まり

通訳は最も古くからある職業といわれるが、近代における会議通訳は1918年のベルサイユ講和会議で始まったとされている (Herbert 1952; 1978; Thierry 1987; Van Hoof 1991)。それ以前はヨーロッパでは外交用語は2世紀余りにわたってフランス語であっ

Hiromi ITO-BERGEROT, “A Short History Of Conference Interpreting In Europe.”

Interpretation Studies, No. 5, December 2005, Pages 255-260

(c) 2005 by the Japan Association for Interpretation Studies

た (Pitti-Ferrandi 1991)。しかし第一次世界大戦終結に当たって、勝利した連合国側で唯一米国の代表がフランス語が話せなかったため、英仏の通訳が必要となった。通訳を担当したのはロンドン大学でフランス史を教える Paul Mantoux 教授であった。この会議においてはすべての発言がフランス語から英語にあるいはその逆に逐次通訳された。

その後設立された国際連盟は英語とフランス語が主要言語となり、会議における発言は仏語から英語にまたその逆に逐次通訳された。当初は英仏双方をこなせる国際機関のスタッフが通訳をしたようだが、自然と通訳が上手な人に依頼が集中するようになり、通訳を専門とする人達が出現した。この時期、ドイツ語・ロシア語も会議用語として使われる頻度が高く、これらの言語と英語・フランス語との通訳を得意とする通訳者も現れた。

彼らは主として国際機関のスタッフであったり、外交官あるいは弁護士といった職業に就き、亡命白系ロシア人であったり、あるいは第一次世界大戦の難を逃れて国を転々とするといった生き立ちの人もあり、3ヶ国語以上をこなし、大学教育を複数の国で受けた高学歴の人たちでもあった。従って、通訳を専門とするようになって、国際機関の職員や外交官と対等に処遇された。彼らは会議通訳者 (conference interpreter) と呼ばれるようになった。

当時の会議通訳の仕方は逐次通訳であったが、一文ごとに切って通訳するのではなく、発言者がひとくだけ話し終わるのを待って通訳するという形式であった。これは会議参加者の半数は発言者のスピーチを直接理解できるという状況において、また演説をパフォーマンスとして評価する伝統風土において自然なことであった。演説を一文ごとに切ったのでは話し手は勢いをそがれてしまい、興に乗ったスピーチをすることはできない。スピーチを直接聞く方にとっても、スピーチのポイントを捕らえ難い。従って発言者は一区切りつくところまで一気に話し終え、これは5分から10分、時にはもっと長く続くこともあった。通訳者に対しても原発言に劣らぬ説得力とパフォーマンスが要求された。言語の理解力が十分であるのは当然とされ、通訳者は細部まで忠実に通訳するために各自ノートの取り方を工夫した。

当時の通訳者はもともと国際会議関連の職業に就いていた人たちであったので、各国代表として発言する参加者と多くの知識・経験を分かち合い、発言の内容を十分に理解できる素養をもっていた。また訳出言語において、堂々としたスピーチができるという能力を備えた人たちでもあった。

2. 逐次通訳の黄金時代

通訳者のスピーチ・パフォーマンスが重視されただけに、自分が最も自信を持って話せる言語 (通常母国語) への通訳を主務とすることが、通訳者の常識となった。欧州の会議通訳業では通訳者が職業的に使う言語を ABC と3クラスに分けているが、

それもこうした事情に由来するものである。ABC どの言語も理解力についてはその国の高等教育を受けた人と同じレベルとされ、A 言語は通常母国語、B 言語は母国語に次いで得意な言語で、表現力はその国の人に比べて少々劣ってもひと通り何でも A 言語の発言を訳せるだけの表現力を持つ言語、C 言語は会議通訳レベルの表現力はないので、A 言語への一方通行の通訳に徹するという言語である。会議通訳は逐次通訳でも複数の通訳者が交代で行うので、言語の組み合わせが逆になるパートナーと組めば、各自が A 言語への通訳に徹することが可能である。

多国間の会議においては、各国代表が自分の通訳者を連れてくるという方式も考えられるが、その通訳能力のレベルはまちまちになりかねない。国際機関が、有能な通訳者を採用し、彼らがプロとして全会議参加者に公平に通訳サービスを提供することが、会議参加者の平等の権利と会議の効率よい運営の確保につながると認識された。

さらには複数の国の代表が英語あるいはフランス語で発言する国際会議においては、一人の通訳者が米国代表の発言も英国代表の発言も仏訳し、またベルギー代表の意見もスイス代表の主張も仏語から英語に訳すということになる。次々と異なった国の利益を代弁する立場にあるだけに、通訳者が中立の立場にあり、いかなる国の圧力も受けないことが重要。通訳者が守秘義務を負うことは当然であるが、その中立性の堅持が、発言者に忠実な通訳を可能とすると認識された。こうして通訳者の職業倫理が不文律ながらも定着するようになった。この時代は逐次通訳の黄金時代と呼ばれている。

この時期、国際会議で発言した日本代表は英語あるいはフランス語を話す外交官だったので、日本語の会議通訳は行われなかった。ベルサイユ講和会議に出席した西園寺公望全権委員団の随員として講和会議を傍聴した近衛文麿（1920）は、日本代表が英語で発言した、また英語の発言は仏語に通訳されたと「戦後欧米見聞録」に書いている。1933年にジュネーヴの国際連盟本部で日本代表として脱退演説をした松岡洋右は高校時代に渡米しオレゴン州立大学を卒業して外務省入りしている（三輪 1971）。

プロの通訳者は3ヶ国語をこなすことが常識とされる欧州では、通訳者2名でも3ヶ国語の会議を担当することが可能である。しかし3ヶ国語以上が必要になる会議では逐次通訳が2重、3重に行われるので待ち時間が長くなる。そこで同時通訳の試みが1920年代から行われていた。1925年ごろに、ボストンの Filine という人物が同時通訳機材を発明し、IBM が特許をとった。これに多少の改良を加えて1928年のILO総会で同時通訳が試験的に導入された。この会議期間中には7ヶ国語が使用されたセッションもあった。しかし1930年代の政治情勢は多国間会議を効率化する革新を進めようという機運を盛り上げるものではなく、ILOを除いては同時通訳の利用はほとんど進まなかった（Kaminker 1955 ; Baigorri-Jalon, 2000）。

3. 同時通訳の時代へ

同時通訳が大掛かりに使われた最初の会議は1945年に始まったナチスの戦犯を裁

くニュールンベルグ裁判であった。この裁判では裁判官は連合 4 国(言語では英・仏・露)、裁かれる方は主としてドイツ語、証人はナチスに虐げられた欧州各国の人々と、常時 4 ケ国語の言語の通訳を必要とし、これは同時通訳を不可欠とするものであった。幸いにも同時通訳の経験者で最低限必要な言語のチームを作ることは可能であった。連合 4 国から通訳方式の選定をまかされた Léon Dostert 大佐は、IBM の機材を使用する同時通訳の導入を決めた。4 ケ国語のセッションの同時通訳では、各ブース 3 人ずつ、1 チームを 12 人の通訳者で構成するという方式が採用され、これはその後、国連等国際機関のチーム編成の基準となっている。公判の数が増えるとともに不足する通訳者を補うために、言語に堪能な若い人たちを集めての同時通訳速成が行われ、通訳チームが補充された (Kaminker 1955; Ramler 1989; Skuncke 1989; Baigorri-Jalon 2000)。

ニュールンベルグ裁判の 1 年後に開廷した東京裁判でも連合 4 国はニュールンベルグと同様の同時通訳設備を法廷に設置したが、日英・日中・日露等の言語の同時通訳経験者は皆無であった。起訴状のように事前に文書が用意されたものについては訳文が作られ、ブースからほぼ同時に読み上げられたが、被告や証人とのやり取りは逐次通訳で行われた (児玉 1971; 渡部 1998)。

他方、国際連合設立に当たっては、1946 年に公用語は英・仏・西・露・中の 5 ケ国語と決まった。国連機関は一定数の常任のスタッフ通訳者を採用し、不足分はフリーランス通訳者で補ったので、会議通訳者の需要は急速に高まった。欧州石炭鉄鋼共同体の設立から始まる欧州共同体の機構整備もドイツ語・イタリア語・オランダ語を含む欧州言語の通訳需要をさらに高めた。これら国際機関では同時通訳が日常的に使われることとなった。

4. AIIC の設立、および本格的な通訳教育・通訳研究の始まり

戦前の逐次通訳黄金時代に評価の高かった通訳者はこの時期、新設の国際機関の通訳部長に任命されたが、彼らを中心として国際的な通訳者団体を設立する機運が高まり、1953 年、AIIC (Association internationale des interprètes de conférence) 設立に至った。通訳者の利益を代表する機関として、業務規定が制定され、倫理規範も明文化された。AIIC は国際機関 (国連とその諸機関、欧州共同体、欧州議会、OECD、NATO、欧州評議会等) が通訳者の採用条件を決めるにあたって、通訳者を代表して交渉に当たる機関となった。

会議通訳者を専門に養成する機関もジュネーヴ、パリ等に作られ、そのいくつかはやがて大学の修士課程と国から認定される職業専門学校と位置づけられるようになった。代表的な教育機関はパリ第 3 大学の ESIT、ジュネーヴ大学の ETI、ハイデルベルグ大学の IUD である。これらの機関では会議通訳の実践に基づいた理論研究も始まった。

今日、会議通訳者が活躍する場は国際機関に限らない。サミットをはじめとする政府間会議、外交交渉、民間の種々の国際会議、経営者団体・業界団体・労組・NGOの会議、企業間の交渉、種々の施設の視察等々、多岐にわたっている。同時通訳が主流となっているとはいえ、逐次通訳で行われる会議にも重要なものは多い。首脳会談・外交交渉、公式訪問においてのスピーチ、また2国間の専門家同士の会合、視察、調査等も逐次通訳であり、内容が専門的なものとなることが多い。

戦前に逐次通訳黄金時代があった欧州では、逐次通訳が通訳の基本とされ、同時通訳のみならず、公式な会議の場における逐次通訳の技術(5分間のスピーチの逐次通訳)をもマスターすることがプロの通訳者の要件とされている。

著者紹介： BERGEROT 伊藤宏美 (Hiromi ITO-BERGEROT) 1978年 ESIT 卒業。以来パリをベースに会議通訳を職業としている(日本語 A、仏語 B、英語 C)。AIIC 会員。1980年代半ばより ESIT で仏・英→日本語の通訳演習指導を担当。現在 ESIT の博士課程で逐次通訳におけるスピーチ理解の認知プロセスについて論文を執筆中。

【参考文献】

- AIIC : What is it. [Online] www.aiic.net/ViewPage.cfm/article8 (July 2005)
- Baigorri-Jalon, J. (2000), Etablir un contact entre les langues aux Nations Unies, *Chronique des Nations Unies*, Volume XXXVII, N°1, 2000, Département de l'information, ONU ; www.un.org/french/pubs/chronique/2000/numero1/0100p84.htm
- Baigorri-Jalon, J. (2000), Bridging the Language Gap at the United Nations, *United Nations Chronicle*, Volume XXXVII, N°1, 2000, Department of public information, United Nations, www.un.org/pubs/chronicle/2000/issue1/0100p84.htm
- Herbert, J. (1952). *Manuel de l'interprète*. Librairie de l'université Georg, Genève.
- Herbert, J. (1978). How conference interpretation grew » in Gerver & Sinaiko, *Language Interpretation and Communication*, Plenum Press. New York and London, pp.5-10.
- Kaminker, A. (1955). Conférence à l' ETI, Université de Genève. In Lederer, M. (1981) *La traduction simultanée*, Minard, Paris, pp.17 - 18
- Pitti-Ferrandi, F. (1991) Français, langue diplomatique, *Revue* N°115 - 4^e trimestre 1991, AMOPA, Paris. [Online] www.amopa.asso.fr/francophonie-defi2.htm(July 2005)
- Ramler, S. (1988) Origins and challenges of simultaneous interpretation : the Nuremberg trials experience. In Hammond D. L. *Languages at Crossroads*, Learned Information inc. Medford, NJ. pp.437-440
- Skuncke, M-F. (1990) Tout a commencé en Nuremberg ... *PARALLELES*. N°11, E.T.I.,

Université de Genève, pp. 5-8

Thiery, Ch. (1987) Le traducteur et l'interprète. In *LE FRANÇAIS DANS LE MONDE*, Numéro spécial, pp. 11-17, Vanves.

Van Hoof, H. (1991) *Histoire de la traduction en Occident* Duclot, Paris.

児島 襄 (1971) 「東京裁判」(上)(下) 中公新書

近衛文麿 (1920, 1981) 「戦後欧米見聞録」 中公文庫

三輪公忠 (1971) 「松岡洋右」 中公新書

村松増美 (1978) 「私も英語が話せなかった」 サイマル出版会

西山 千 (1970) 「通訳術」 実業之日本社

渡部富栄 (1998) 「東京裁判の通訳研究 東条英機証言を通じて」『通訳理論研究』14号(第7巻第1号)